

幼稚園における植物栽培から食育や造形へつなげる保育実践

—赤しそと棉を教材として—

齊藤佳子・林美代・渡辺愛華・秋山千晃・原田詩織
田川実果・福家明美・平尾美香・廣瀬三枝子

1. はじめに

幼児期の教育内容のなかでも栽培活動は重要な役割を担っている。幼稚園教育要領及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領、保育書保育指針では、領域「環境」の内容に「(5)身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする」¹⁾という項目がある。

栽培活動については、保育者養成教育でも、例えば、柴崎ら(2009)の「実習 保育内容 環境」²⁾、近藤ら(2018)による「生活事例からはじめる—保育内容—環境」³⁾など教科書で園芸活動・栽培活動について記述されている。また研究レベルで、栽培活動の実践、意義や教育的効果について述べたものがみられる。

例えば、富岡は仏教の視点から保育環境に栽培・飼育を導入する意義を考察している。子どもたちが身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつようにというねらいがあり、命の大切さに気付くことが大切にされていると述べている⁴⁾。長谷は、飼育・栽培活動における幼児にとっての意義を「子どもたちにとって自然との触れ合いのある生活を、園の中で保育者が行う環境構成及び、その再構成を通して子どもの興味関心を喚起するなどにより意図的に作り出すことであると言える。言い換えれば、園において子どもたちが、保育者そして友だちと一緒に飼育栽培活動に日々取り組

むことは、自然体験を日常的に重ねることができる生活を、子どもたちが園で創り出すことに繋がっていくということ」⁵⁾としている。

また野菜栽培については、食育活動とつなげて、栽培から収穫し、調理して食べるところまでの一連の保育及び教育実践が報告されている。川口ら(2013)による幼稚園における畑でサツマイモを栽培し、その成長に気づくと共に収穫の喜びを味わう体験活動に関する報告⁶⁾、仙田の仏教の視点からの保育における栽培・食育活動についての考察⁷⁾、鈴木福島の福島県における幼稚園・保育所の栽培活動を通した食育の現状と課題に関する調査⁸⁾や富永ら(2018)の幼稚園での栽培活動から料理と食までの活動報告⁹⁾がある。宇佐見ら(2015)の幼児が野菜の栽培・調理・共食活動を行い、その実践から幼児がどのような感情を持ち、園や家庭での行動にどのような影響があるかを検証し、食育の効果を述べた研究¹⁰⁾もある。

なかでも仙田は「栽培・食育活動は、子どもたちの自然体験の不足が言われるなか、栽培活動は園内で日常的に行うことのできる貴重な体験の機会となっている。また、園児が栽培収穫した野菜や果物を調理して食し、栽培・食育活動が一体的に行われている園も多い。植物の世話や成長の観察に加え、花が付き、実が成り、収穫し、食することができる野菜やハーブ、果物は、子どもたちにとり、自然や食への大きな興味・関心を抱かせるきっかけとなっている」⁷⁾と述べている。

さらに、栽培活動から造形活動への展開事例としては、村田の保育所におけるなすの栽培からハンカチの染色までの実践報告¹¹⁾や保坂らの棉と藍の栽培活動と染織活動を取り上げ、その活動の保育にお

平成31年1月7日受理
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地
香川短期大学 子ども学科
TEL 0877(49)8042 FAX 0877(49)5252
Email ysaito@kjc.ac.jp

る意義と効果について検証した実践研究¹²⁾がある。

このように栽培活動は、幼稚園や保育所での幼児の活動になくてはならないものになっている。それだけでなく、栽培後は収穫して、調理による食育活動や製作などの造形活動へ応用することで保育教材として高く評価されている。

本研究では、本学附属幼稚園において取り組んだ赤しそ・青しそ及び棉の栽培と、それらを用いての子どもたちの遊びの様子や担任教諭の関わりについて述べる。また栽培から食育や造形への展開に関する保育実践について報告することを目的としている。

2. 研究の方法

2018年4月5日、本学附属幼稚園にて研究テーマ「幼稚園における栽培活動の展開」について打ち合わせを行った。研究への協力の要請と研究対象、研究方法、活動期間、活動内容、子どもの会話や行動の観察・記録（エピソード）について説明をして承諾を得た。詳細は以下の通りである。

(1) 研究対象

香川短期大学附属幼稚園の5歳児つばめ組23名、はと組22名の保育活動と担任教諭

(2) 研究方法

- ①栽培活動における幼児の会話、エピソードや行動を観察・記録する。
- ②子どもの会話や行動の観察・記録（エピソード）の分析・考察をする。
- ③活動の影響（効果、問題点）を考察する。

(3) 活動期間

2018年5月～2018年12月

栽培活動は5月連休明けから7月（夏休み前まで）、棉は10月頃までの3～5ヶ月間とした。

(4) 活動内容

土入れから、種まき、収穫から調理・製作への展開（食育・造形など）

〔栽培活動〕

- ①どこに植えるか
 - ・草花・野菜用プランター
 - ・園庭の畑
- ②植える植物・野菜と調理、製作への展開
 - ・ミニトマトなど夏野菜の栽培から食育・調理（トマトごはん、ピザなど）
 - ・しそ
 - ちりめん青しその栽培から色水遊び
 - ちりめん赤しその栽培から色水遊び、染色（和紙染め）、食育として調理（しそジュース）
 - ・^{わた}棉・・・香川県の地域植物
 - 棉の栽培から造形（サンタクロースひげ、クリスマスリース雪）

(5) 教材に赤しそ・青しそと^{わた}棉を選んだ理由

主な理由は、筆者の昨年度の研究で、栽培活動の教材として赤しそを提案したことによる。「栽培活動では、赤しそ栽培に取り組むのもいいだろう。植物の成長の様子を観察するだけでなく、収穫し色水遊びを行ったり、和紙や布などを染め、製作に役立てたりすることもできる。また赤しそジュース調理をし、試飲することもできる。幼児や児童の発達に即した学習内容が工夫できそうである」¹³⁾と述べた。赤しそは子どもたちの遊びや造形、そして食育へ応用できることで着目した。

また赤しそだけでなく青しそを選定した背景に、筆者の子ども時代の体験がある。毎年、夏になると、自宅に隣接した畑に祖父が植えたであろう赤しそと青しそが元気に繁っていた。それを見て「同じような葉だけど、色が違うなあ」と感じていたことによる。また祖母の手伝いで、調理に使用する青しそ摘みをしていた。青しそは、天ぷらになったり、同じ畑で収穫したきゅうりと和えて、きゅうりもみにされた。懐かしい夏の味覚である。赤しそは祖母がしそジュースに調理するので「きれいな赤色だな」と感じつつ飲んでいた。梅干し作りに使用していたのも間近で見えてきた。これら幼い頃の体験が、赤しそと青しそを教材として保育・教育に活かすことを提案した理由である。

次に棉については、筆者の同じ研究で、観音寺市

立豊浜小学校の生活科・「総合的な学習の時間」における棉わたをテーマにした実践をまとめ棉栽培に興味を持つようになったことが、教材に選定する一つ目の理由である。小学校の位置する豊浜地区は、古くは江戸時代から棉が栽培されてきた。棉は讃岐三白の一つとしても知られている。明治の初め頃までは盛んに栽培されていたということから、香川県の地域教材として栽培を試みたいと考えた。

また棉は「栽培植物教材活用目標の分類」¹⁴⁾において、「保育教材として応用可」であることがメリットとして指摘されている。これが教材として選定する二つ目の理由である。なお、この表ではデメリットとして「栽培管理がやや困難」とも記載されている。

加えて、背景に筆者の子ども時代における棉の栽培体験がある。母が知人からもらった種を一緒にプランターに植えた。その棉がどのように成長したのか、水やりをしたことも具体的には覚えていない。しかし、やがて白い花が咲き、結実した。そして葉がすっかり茶色になる頃、棉がたくさん出てきた。その時の感動と手で触った時のふわふわした感触を記憶している。棉と言えば、自宅でクリスマスツリーを飾る際に、雪に見立てて葉の上に乗せていたものと同じ素材だと気づき不思議に思ったものである。

以上のことから、今の子どもたちも子ども時代の筆者と同様、それら植物の成長や、しその葉の色の違い、白い棉の実に興味を持つに違いないと考え栽培に取り入れることにした。なお、ミニトマト、きゅうり、なすなど夏野菜の栽培活動については紙面の関係で別稿としてまとめる。

3. 赤しそ・青しそ栽培から食育、色水遊びへの展開

ここでは、赤しそ・青しそ栽培から、色水遊び、食育としてのしそジュース調理までの取り組みについて述べる。

(1) 赤しそと青しその栽培

赤しそは野菜用プランターに種から植えた。その成長過程は、残念ながら子どもたちが興味・関心を持つものではなかったようである。苗から植えると



図1 赤しその摘み取り

比較的成長の速いミニトマト、きゅうりやなすのように小さな実が大きくなることもないからであろう。しかし7月17日の記録に、茂った赤しそ・青しそに気づき、「うわあ～これな～に。色が違う」という子どもの声が記録されている。この質問に対して担任教諭は「これは、『しそ』って言うんだよ。摘んでもいいよ!」と応答し、さらに子どもが「いっぱい摘んでみよう!」「色水遊びしたい」と青しそ・赤しそに興味を持つ様子が記されている。図1は赤しそが大きく成長し葉を繁らせている。子どもが葉を1枚ずつ丁寧に摘み取りしている写真である。この頃になると、色水遊びに大いに利用され、子どもたちの知的好奇心を高める魅力的な教材となった。

(2) 赤しそジュースの調理

7月18日、しそジュースの調理はベテランF教諭が担当し、子どもたちの前で実演された。大きな透明ボウルを使用し、子どもたちが見やすいように工夫した。透明ボウルから煮出した赤しその葉を取り出す。次に「魔法の粉(クエン酸)を入れたらどうなるかな。するとあら不思議、くすんだ赤色の水から鮮やかな赤紫色の水に変身!!」という仕掛けである。担任教諭の観察記録には、「『うわあ～いいに



図2 赤しそジュース調理写真

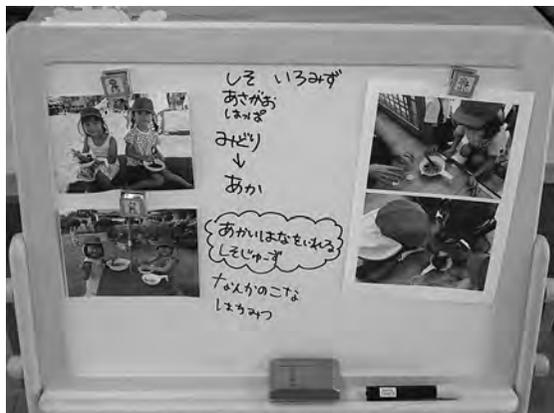


図3 色水について話し合い

おい。ゆかりのにおいがする』色の変化にもみんなで気付くことができ、みんなで『うわあ〜』と大喜び!! 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなど自然に触れて生活し、その大きさ・美しさ・不思議さなどに気付くことができた」とある。子どもたちが自分の知っている食べ物である「ゆかり」の匂いと煮出した赤しその匂いを結び付けたり、色の変化に歓声をあげ、感動する様子が見られる。赤しそジュースは、はちみつを入れ甘みをつけてから冷やし、翌日試飲することになった。この取り組みについては、「お知らせ」として全園児の保護者宛にメール配信された。以下、その内容である。

今日、年長組さんが育てたシソを収穫して、F先生のシソジュース作りを見て、魔法の粉でジュースの色が赤く変わった驚きと明日飲む楽しみを感じて帰りました。明日は、各クラスにも試飲程度の量になりますが、季節のジュースをみんなで味わいたいと思っています。

(3) 色水遊び

7月17日の担任教諭の観察記録に「色水遊びも楽しめ、しそを取ることも楽しめました」と記されている。

9月3日、2学期の始業式に教室で色水遊びについてボードを使って子どもたちが話し合った。そのボードを図3に示すとともに、話し合いの内容を順を追って述べる。

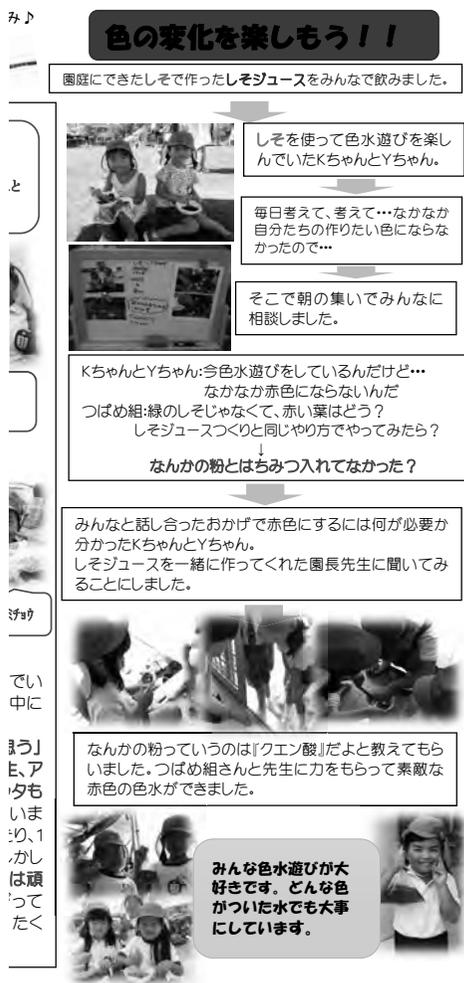


図4 つばめ組10月クラス便りの一部

①青しそ、あさがお、葉っぱを摘み取る。②青しそ、あさがお、葉っぱをすり鉢に入れてすって、そこに水を入れて、さらにする。③緑色の色水になる。④どのようにしたら赤色の色水が作れるのか。⑤赤色の花を入れてするとよいか。⑥しそジュースのような色水にしたい。⑦F先生はどうやって作っていたか、何かの粉を入れたか、はちみつを入れたか。⑧園庭で色水遊びをする。⑨園長先生に魔法の粉について教えてもらう。⑩色水の変化に気付く。⑪はちみつを入れても色の変化は見られない。クエン酸で色が変わった。⑫ピンク色になった。この活動の様子は、つばめ組の10月クラス便り(図4)で「色の変化を楽しもう!!」として写真と共に紹介された。

「赤色の色水を作りたい」という子どもたちの思いやつぶやきから、担任教諭は赤色にするために必要なことを導きだしていく。赤しそジュースの経験から赤色にするためには「魔法の粉=クエン酸」が必要ということ子どもたちが理解していることがわかる。色の変化について、赤しそジュースと色水遊びを関連付けて考える姿が見られた。

4. 地域教材である^{わた}棉の栽培から造形への展開

(1) ^{わた}棉の栽培

棉を栽培するための種は、学校の授業での栽培に向いているという理由から和綿の白(真岡木綿)を選んだ。真岡木綿は江戸時代から栽培されている品種である。日本の風土に合い、最も栽培しやすい在



図5 葉を茂らせた棉

来種だとされている。鉢植えやプランターでも栽培できるところも選定の決め手となった¹⁵⁾。

種まきはKさん(通園バスの運転手)が中心となり行った。Kさんは栽培活動にあたり土づくりから、種まき、水やりと協力してくれた。担任教諭はこれまでに棉の栽培経験はなく、栽培の知識を持っているKさんあつての活動となった。

棉は成長し7月中旬には青々とした葉を茂らせた(図5)。7月17日の担任教諭の記録には、「これなに?」(図6)、つぼみを見つけたときの子どもの声。「花ができてる!!」(図7)、白い可憐な花が咲いて



図6 棉の花のつぼみ



図7 白い可憐な棉の花

いることに気付いたときの子どもの声が拾われている。そして、保育者の援助として「なんだろうね？子どもたちが調べたり、考えたりする時間を大切に」と記されており、担任教諭として環境構成の工夫が見られる。

(2) 棉の収穫

5月に種まきした棉は、10月頃に収穫期を迎え、棉摘みができると予想していた。しかし予定より早く、9月頃には棉摘みが始まった。収穫した棉を図8・9に示す。園庭でプランター栽培していたこともあり、夏休み明け、棉が見え始めると園児の興味をかき立てたと思われる。好奇心旺盛に摘んで、袋や虫かごに集める姿が見られたと担任教諭から報告された。ふわふわとしたやわらかい感触を楽しみな

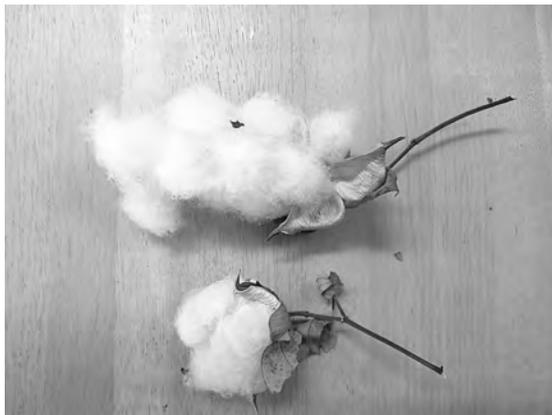


図8 収穫した棉1



図9 収穫した棉2

がら、棉摘みをする光景が目に浮かぶ。袋や虫かごに集める様子から、かわいいものや大切なものを集める心境がうかがえる。棉の栽培については、子どもたちより保護者の方が関心を示したとの報告もなされた。

(3) 棉を利用して楽しい造形活動へ

4月の打ち合わせでは、棉の収穫後はサンタクロースのひげやクリスマスリース雪として製作に用いることを予定していた。しかし前述の通り、日常の遊びの中で摘み取ってしまった。副園長から製作に使用するには十分な量は残っていないと報告があった。当初の予定からすれば、製作に使用できない事は残念であるが、むしろ筆者は肯定的に捉えた。なぜなら、子どもたちが園庭での遊びの中で、プランターの棉に興味・関心を持って手に取った証だと考えられるからである。

そこで収穫した棉を使用する予定を変更し、棉の実を購入することにした。棉の実はリース製作用の花材として販売されているものを選んだ。幼稚園で栽培した和綿の実より大ぶりであるが、購入した棉の実を用いてクリスマスリースを製作することとした。

クリスマスリース製作をするにあたり、園長・副園長・担任教諭と打ち合わせを行い、5歳児を対象に12月12日に実施した。クリスマスリース製作の最初の工程は、リース土台を作るために赤・白・緑の毛糸を各15本ずつ束ね、それらを三つ編みすることであった。筆者は「自分たちで三つ編みをしてみよう」と子どもたちに働きかけることを提案した。しかし「三つ編みは未経験な子どもが多く、たいへんな作業になると思われる」という副園長の意見を踏まえ、リース土台は事前に準備することにした。

当日、副園長から渡された園庭で収穫した棉の実(図10)も教室へ持ち込んだ。5・6人の子どもたちが寄ってきて、ボウルに入れた棉を手に取り、「ふわふわ～」と言いながらやわらかさを楽しむように触ったり、「中に種が入っているよ」と棉の実から小さな種を取り出すことに夢中になる子どももいた。

クリスマスリース製作では、「棉って知っていますか？園庭のプランターで育てましたね」と今まで

の経験で知ったことを思い出せるように言葉を投げかけたところ、「咲いていた!!」と元気な返答があった。子どもたちの記憶に残っていることを嬉しく感じた。毛糸のリースなので、あたたかい感触も話題にした。

クリスマスリース製作は、毛糸のリース土台にカラフルなフェルトシールをあしらひ、好きな位置に棉の実をボンドでつけるという簡単な作業である。ボンドを扱う場面では担任教諭らの補助もあり、順調に工程を終了することができた。製作後は、ラッピングをした(図11)。特に女兒がラッピングに夢中に取り組んでいた姿が印象的である。マスキングテープを使用し、かわいくおしゃれにラッピングをしていた。子どもたちから笑みがこぼれ、「お母さんにプレゼントする」「サンタさんにあげる」など



図10 収穫した棉3



図11 棉を用いたクリスマスリース

の声があちらこちらから聞こえた。クリスマスリース製作は子どもたちにとって楽しい取り組みになったと思われる。

なお園庭で収穫した棉は興味・関心のおもむくままにやわらかな感触を楽しんだり、棉の中から種を取り出して遊んでいたという。筆者は、クリスマスリース飾り用の大きな棉の実を見た時の子どもたちの反応について関心を持っていた。「かわいい」「ふわふわ」と言いながら、やさしく手で触る子どもがいたが、形を崩すことなく原型を留めたまま飾りつけることができた。

5. 考察

本学の附属幼稚園と連携し、植物栽培からその素材を用いて食育や造形へつなげる保育実践を行った。具体的には、本研究では、植物栽培として赤しそ・青しそと棉の栽培から収穫までを行い、収穫した材料を遊びや造形、食育の素材として利用することを目的としていた。その結果、赤しその色水遊びや食育による赤しそジュース調理・試飲、棉摘みは子どもたちにとって楽しく感動的な体験になったと考えられる。また棉の実をあしらったクリスマスリース製作も楽しい取り組みになったと思われる。保育実践としては、概ねそれらを達成できたと考えている。

しそや棉を教材とした選定理由は、前述のように筆者自身の子ども時代の原体験によるところが大きかった。しかし栽培活動のみで終わるのではなく、別の保育教材として活用できるものという条件で、赤しそ・青しそ、棉を選択した。赤しそ・青しそは子どもたちにとって馴染みのない植物だったかもしれない。また棉も子どもたちにとって初めて見る植物だったであろう。まして、その成長過程を見る機会はほぼないと考えられた。そこで、子どもたちと保育者が園庭のプランターでそれらの栽培を行うことで、植物の成長に触れる機会を作ること。そして、例えば赤しそに関しては、収穫後は色水遊びにつなげたり、また赤しそジュース調理で栽培と食育を結ぶことを見通しつつ実践することができた。

特に赤しそ栽培では、その成長過程に興味を持つよりはむしろ茂った葉を摘み取り、色水遊びに利用

された。この色水遊びが夏休み明けにも継続されたことに着目したい。「きれいな赤色の色水を作るためにはどうしたらいいのだろう」という浮かび上がった疑問に、子どもたちが話し合いの中で、さらに実際に実験してみても、問題解決を図っている様子が読み取れる。色水遊びでの問題発見や夏休み前の赤しそジュースの体験から解決の糸口を見つけた。園長や担任教諭の適切な援助により子どもの遊びが豊かに発展している事例である。この事例での子どもたちの「色の変化への気付き」は小学校「生活科」における気付きと同様のものである。このような探求活動が、幼児期に培われることで、小学校における調べ学習にもつながることが期待される。

なお、子どもたちの話し合い、コミュニケーションは幼児教育における領域「言葉」に関係しており、協同性からは領域「人間関係」にも関係している。

附属幼稚園では、色水遊びは子どもたちに大変人気の遊びである。園庭に設置したパラソルの下で、色水遊びができる環境が用意されている。例えば6月25日の記録にも、色水遊びについて記されている。子どもたちが「色水したい!!」「アサガオとってこよ～」「うわあ～むらさき、きれい!! どうして水が水色に変化するの? ずーっと置いておきたいほど、これきれ～い!!」と色の美しさや不思議に触れて感動する子どもたちの生き生きとした姿が描かれている。また7月4日の記録では、色水遊びを楽しんだ3名の子どもたちの様子について次のような記述がある。「花や葉っぱなど色々なものをこすって色水遊びを楽しみました。同じ花や葉っぱを入れても少しずつ色が違うように見えて、花や葉っぱからいい匂いがしたり、色の変化に気付いたりして楽しみました。3人が同じような花や葉っぱを使っても3人が3人とも同じではなく、少しずつ色が違って『紫やな～』、『えー緑!?』など驚きもありました。」このように幼稚園では日常的に色水遊びを取り入れ、楽しんでいる。

次に棉栽培については、幼稚園で行った栽培活動に保護者が興味・関心を示してくれた。幼児・保護者・幼稚園の三者において棉の栽培過程を共有できたと考える。しかしながら担任教諭と園児だけで栽培管理をすることは少々困難であった。本論で担任教諭はこれまでに棉の栽培経験はなく、栽培の知識

を持っているKさんあつての活動となったことを述べた。担任教諭の棉栽培に関する専門的知識が不十分な場合、栽培活動を進めるためには、協力者として年配者からの補助体制や農作業の経験と知識の豊富な人からの協力が必要と思われた。

棉栽培の意義について、棉が次第に成長し、やがて花が咲き、その後、棉毛が伸長するにつれて全体が棉の塊状になった時に子どもの強い関心を集めた。それまでは棉に対する直接的な関わりはほとんど見られなかったが、棉の実を手に触れたり、それを摘んだりした。その結果、前述のように、棉の実の不思議さと手に触れた時のやわらかな特異な感触に気付き、それをかわいい自分の宝物として袋や虫かごに集めた。このことを通して、棉の実の特異な感触を学習し、感性の芽生えにつながる重要な機会となったと考えられる。なお今回、クリスマスリース製作に園庭で収穫した棉を使用することができなかった。今後は栽培から収穫、さらに製作へと結び付きを感じられる一連の活動とすることが大切である。

本研究は、短大の研究者と附属幼稚園の担任教諭との連携、協働なくしては実施し得なかったことが明らかである。別論文とした夏野菜の栽培活動でも、子どもたちの活動の様子が写真を交えて詳細に記録され報告された。4月上旬に打ち合わせを行い実施に至ったが、研究の目的を具体的に示し、理解が得られたことが今回の成果となったと思われる。

無藤が実践とアクション・リサーチと研究とをテーマに「子どもの活動からのボトムアップの分析を必要とする。子どもが園という環境において子どもの集団の中で、保育者が関わるところで、どう動くのか、さらに活動が活動を呼ぶことを通してどう発展するかは、実際に見てみて分かることだ。それはすっきりとした実験や観察にはすぐには乗らない。現場での繰り返しの検討が必要になり、実践者の日頃からの知恵やコツを取り出すべきであり、客観的なデータ収集とともに、園の保育に関わる場所での参与観察なりインフォーマルな取り出しなりが不可欠になる」⁶⁾と述べているように、担任教諭による観察記録が大いに役立った。各活動での子どもたちの様子と保育者の援助や環境構成について読み取ることができた。筆者ら研究者と実践者である

保育者が連携、協働する中で多少とも実証的な研究に近付けることができたと思われる。

6. おわりに

本稿では、本学附属幼稚園において取り組んだ赤しそ・青しそと棉の栽培から、それらを用いての子どもたちの遊びの様子、また食育や造形への展開に関する保育実践についてまとめ、考察を加えた。筆者の昨年度の研究で教材として提案した赤しそ・青しそと棉栽培は、本年度、附属幼稚園の日常的な保育実践として組み込まれ、それら教材の教育的有用性を実際の子どもの活動と保育者の援助から検討することができた。

今後の課題としては、「幼児が具体的に活動する姿、思考する姿を通して学ぶことも大きな意味があると思われるので、学生が栽培活動をするだけでなく、幼稚園と連携し、学生が模擬的に植物栽培の教育実践を行う」¹⁷⁾を実現できたらと考えている。これは昨年度の研究で課題として挙げたが、実践できなかった部分である。この点、筆者は保育者養成課程で小学校「生活科」の授業を担当しており、授業の中で栽培活動を行っている。しかし、本年度は時間割の制約で学生が附属幼稚園で栽培活動することはなかった。また附属幼稚園との連携・協働の観点からすると、今後は栽培活動に限定せず、食育や造形活動など活動の幅を広げたい。学生、短大所属の研究者と実践者である保育者が連携、協働する中で実証的な研究を行い、その成果を附属幼稚園及び短大両者の保育・教育の質の向上に役立てたいと考えている。

注

- 1) フレーベル館, 2018, 幼稚園教育要領解説, 199.
- 2) 柴崎正行編著, 2009, 実習 保育内容 環境, 建白社.
- 3) 近藤幹生, 2018, 生活事例からはじめる - 保育内容 - 環境, 青踏社.
- 4) 富岡量秀, 2013, 保育環境への飼育・栽培導入の意義を考える - 仏教保育からのセンス・オブ・ワンダーへの視点 -, 大谷大学短期大学部幼児教

育保育科研究紀要, 15, 35-41.

- 5) 長谷秀輝, 2017, 子どもの生活と保育内容「環境」とのつながりについての一考察 - 幼児の園での生活と遊びから「生活科」も視野に入れて -, 四條畷学園短期大学紀要, 50, 20-31.
- 6) 川口貴恵子, 川村弘子, 2013, 幼児にふさわしい保育環境を考える - 自然とのふれあい体験を通して -, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要, 13, 145-152.
- 7) 仙田考, 2017, 保育における栽培・食育活動と園庭環境についての一考察 - 仏教保育と関連を踏まえて -, 鶴見大学仏教文化研究所紀要, 22, 1-14.
- 8) 鈴木秀子, 2016, 福島県における幼稚園・保育所の食育の現状と課題 - 栽培活動について -, 会津大学短期大学部研究紀要, 73, 123-158.
- 9) 富永美香, 錦織誠子, 飯國佳代子, 川野圭子, 地下まゆみ, 2018, 食育と栽培を結ぶ保育実践, 大阪大谷大学教育学部幼児教育実践研究センター紀要, 8, 91-100.
- 10) 宇佐見美佳, 眞木優子, 2015, 「野菜の栽培・収穫・調理・共食を通じた幼児への食育の効果」, 羽衣国際大学人間生活学部研究紀要, 10, 41-50.
- 11) 村田浩子, 2007, 幼児教育における領域「環境」に関する一考察 - 保育園での植物の栽培から染色までの取り組み -, 畿央大学短期大学部研究紀要, 28, 31-35.
- 12) 保坂里絵, 佐々木和也, 神山晃一, 金崎美美子, 2009, 綿と藍の栽培から染織活動への展開過程における保育効果の検証, 国際幼児教育研究, 16, 75-84.
- 13) 齊藤佳子, 2018, 幼児教育と小学校教育の連続性 - 小学校「生活科」と領域「環境」の関連から -, 香川短期大学紀要, 46, 97-106.
- 14) 大沢力, 1995, 保育者養成における「生命」教育への一考察 - 貝割大根の栽培・観察の効果 -, 生物教育 35 (2), 163-168.
- 15) <https://www.tane4u.com/item/menka/> (データ入手日: 2018年12月24日)
- 16) 無藤隆, 2012, 保育実践と保育環境 (総説), 保育学研究, 50 (3), 4-7.
- 17) 前掲, 13).